

〔平成十二年度共同研究報告〕

## 都市と大学の関わり

―美大移転を踏まえた大学敷地の可能性の調査―

### 1 はじめに

二十一世紀のはじめに、大学の姿を展望するとき、私たちは大学のフィジカルな施設群を意味する「キャンパス」という言葉が持つ既成概念に必ずしも縛られる必要がないことに気づかされる。機能としての大学施設のありかたが、パーソナルコンピュータやインターネットに端を発する情報革命によってもたらされる実体のないキャンパス、極端な例かもしれないが、いわゆるバーチャル・カレッジが視野に入ってきたために問い直されている。

キャンパスとは本来どのようなものなのか。その存在意義は今後どのようなところに求められるのか。情報化社会の進歩に対応しつつ存在するキャンパスとはどのようなものであって、それに近づくためには何を視野におくべきなのか。また、広く世界を俯瞰して、その発祥から大学等の高等教育を实践するための施設の原点とはどのようなものなのか。さらに、これまでの画一的な大学像とそれにもなうキャンパス像から枠をはみ出すことはあり得ないのか。これらの問い掛けに対して着実な議論を重ねることが必要であろう。本研究において、それがまがりなりにも可能かどうか、探求の第一歩を踏み出した。

### 2 都市との関係から見たキャンパス

#### ① 大学の起源

大学が人の交流するところ、とりわけ都市の産物であることは既に定説だと言える。今日における大学と呼ばれるものが生成するためには、都市の持つ人間の密度と交流の豊かさ、そして時には激しさが必要であっ



図2-1 ハイデルベルク大学

坂本英之  
鐸隆弘

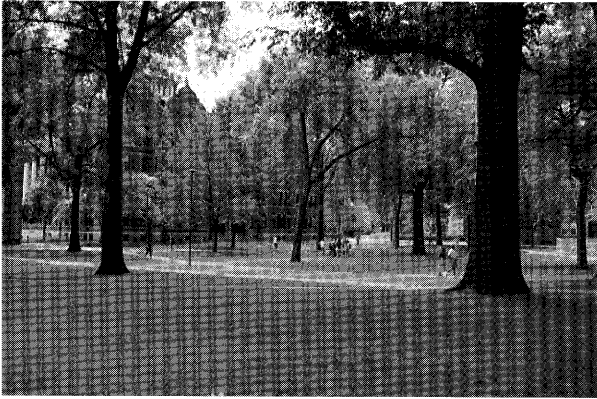


図2-3 ハーバード大学

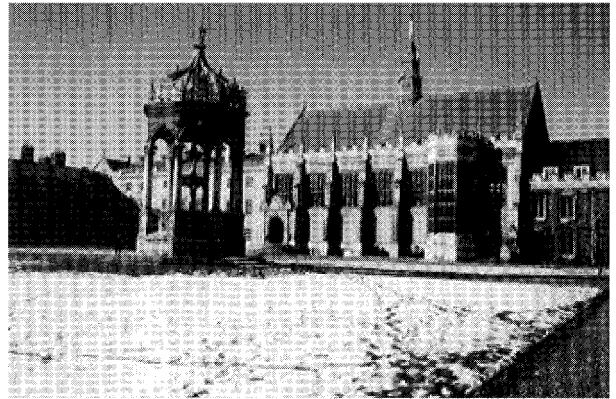


図2-2 ケンブリッジ大学

たとえられる。ボローニャ (Bologna イタリア)、ハイデルベルク (Heidelberg ドイツ)、パリ (Paris フランス) 等、中世ヨーロッパで発祥した多くの大学がそれである。ただし、これらの大学は現在の私たちがイメージするところのキャンパスは持たなかった。

中世ヨーロッパの都市では今日の大学に相当する高等教育機関は町の至る所に散在していたと言われる。したがって、「大学はどこにありますか」と聞かれても「大学はこの町にあります」としか答えようのないものであったと言う。大学は町の中に溶け込むように混在していて、都市と一体となって存在した。

キャンパスという英語は「野原」の意味のラテン語に由来するが、その言葉と大学を結びつけたのは十八世紀のアメリカ合衆国である。大学の機能として必要

とする小都市を独自に建設したのがアメリカの大学のキャンパスであった。ハーバード (Harvard) などは野原の中に建設されたために、既存の町のインフラは存在せず、大学は自らそれらのインフラづくりと取り組みねばならなかった。

## ② わが国のキャンパス

さて、わが国の場合はどうかであろうか。江戸時代中期には江戸、大阪京都では多数の私塾が開かれていたが、その地図上の分布は、中世ヨーロッパの大学との類似的な傾向を見せると言われる。当時の高等教育機関であった私塾が都市の中かなりの密度を持って存在する地区がいくつか見られるようだ。

わが国では高度経済成長期にあって大学と都市の関係は疎遠になったと言える。都市にあっては困難な大規模な増設や新しい大学の設立のため、郊外に敷地を求めた。十分な広さの敷地を良好な環境の中に確保できることが郊外型キャンパスの特徴である。しかしそれによる弊害も大きかった。

だが、近年の少子化傾向は大学施設の拡大を抑制し、今後はキャンパスリニューアルや施設の質の向上に関心が高まるであろう。大学進学率が高まりリカレント教育の機会が増えることで、日本の大学の役割は教育の総仕上げとしてのものから研究活動や社会人の再教育を通じての社会貢献にシフトしようとしている。このような時代に果たして郊外型キャンパスは適切な選択なのであろうか。

実際に郊外に移転した大学では、都心であればある程度期待できた様々なソフト、ハード両面の既設のインフラが、敷地によっては十分ではないと言った問題も存在している。

### ③ 都市と大学敷地

キャンパスには学びの場としての側面以外に生活の場としての側面があることは、あまりに明白なこととしてこれまで議論の対象に取り上げられることが少なかった。しかし近年、学びの場のみを純粹に取り出すことのできるヴァーチャル・カレッジの出現によって、大学施設の生活の場としての側面が改めて浮かび上がってきているのではないだろうか。

生活の場としての大学の位置づけは、教育本来の主要な目的の一つである全人間的な教育を目指すものであるといえよう。つまり、学生は知識の受け手のみならず、その使い手（主体者）として育成されていくことである。さらには生活者としての実体をともなった知識の修得である。それは社会と緊密なつながりを持たなければ成しえないことでもあるといえよう。

また、物理的存在としてのキャンパスの実質的な優位性はそこで起こる集合、交流が生み出す主要なあるいは副次的な活動に依存している。そして、それらの活動こそリアリティーのある社会の中にインヴォルブされてはじめて実りあるものとなる。

こうして見ると、今日大学の敷地としての意味を持っている「キャンパス」という言葉の概念に私たちは強く縛られているように思える。それは一体化した総体としての学びの舎であり、単一の共同体スペースとして、できるだけ異質なものと混じり合わないような「場」を暗黙の内に了解させてはいないだろうか。

しかし、本来、都市の中で生まれ、育まれてきた大学は原点に立ち返って、その存在基盤を考える時期にあるのではないだろうか。日本ではとりわけ少子高齢化や社会構造の変革が進み、大学のおかれた環境は大きく変わりつつある。産学共同、官学共同、社会人教育等、大学はこれまでのような象牙の塔ではなく、社会に開かれた存在となるだろう。都市

との関連でもこれまでの関わり方だけでは決して十分とは言えなくなると思われる。

### 3 大学キャンパスと街の関わりの事例

都市と大学が共にあることは、大学の由来からしても、望ましい姿と言える。それには市民の大学、市民のための大学、自分達が支える大学といった概念が、キャンパスの形態にも反映されていることが重要である。これら概念の具現化のために、様々な提言の中において、望ましいキャンパス形態のキーワードとして、次のようなものが挙げられている。

- ・ 地域との交流
- ・ 都市のインフラストラクチュア
- ・ 情報発信
- ・ 二十四時間型研究、創造施設
- ・ 広場性
- ・ 通り抜け
- ・ サロン／飲食／おしゃべり
- ・ 発想、意見交換の場
- ・ 生活の場

これらは、大学の空間、物、人の開放性を示すものである。ここでは、大学の開放性を焦点に、異なる立地における大学と街の関わりを見ることにとする。

① 名古屋芸術大学

名古屋市北部に隣接する西春町に位置し、美術学部と音楽学部からなる芸術系大学。二つの学部は二キロメートル程離れて、それぞれのキャンパスを持つ。美術学部は、学生数は約千三百人、半分がデザイン系の学生である。名古屋鉄道の各駅停車の停まる駅から歩いて約十五分の距離にある。周囲は水田や畑の農地に囲まれており、都市の広がりである居住区域からは、独立した形のキャンパスとなっている。

キャンパスの中ではギャラリーが、学外の人に開放されている施設である。元は図書室と実習場であった部屋である。大学の地域への開放と、広報機能の充実を目的に、数年前に改修され、できたギャラリーである。キャンパスの中でも、正門を入ってすぐの目立つところにあり、図書館、カフェテリア、売店、大講義室などの人の集まる施設に併設されている。広さは、千六百平米あり、町村レベルの自治体が運営している美術館

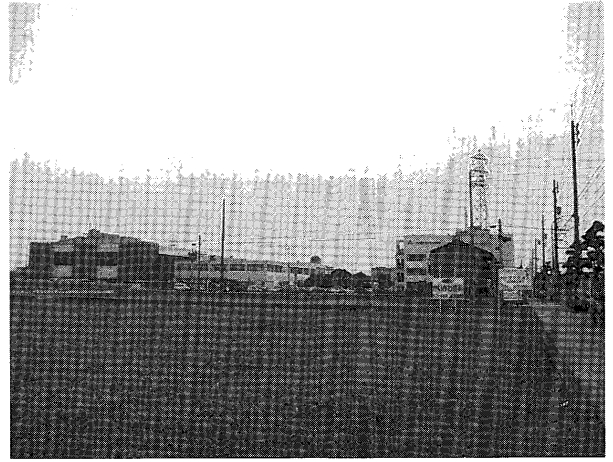


図 3-1 名古屋芸術大学美術学部遠景

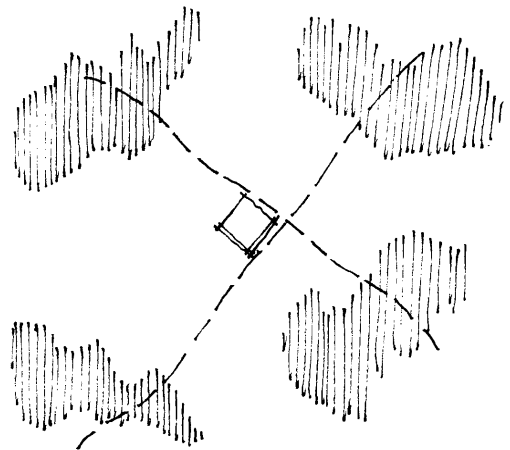


図 3-2 集落から独立した拠点型のキャンパス

ほどの大きさを持っている。大と小の展示室がひとつづつ、作業スペースとして大と小のスタジオがひとつづつ、それとラウンジが設けられている。教員と学生が利用している他、学外者としては卒業生が主な利用者である。春と秋には、外部から作家を招待し企画展を催している。年二回のこの催しが大きなもので、夏休みを含め他の期間は、学科単位、研究室単位、教員個人、卒業生による一週間から二週間の展覧会で、一杯利用されている。スタジオは国際交流施設としての性格が強く、ひとつのスタジオは留学生の実習室に、もうひとつは外国からの教員の制作の場として、利用されている。また、卒業制作展はここでは行われていない。多くの人が集まる名古屋市中心部の美術館で行われている。

運営は、ギャラリー専任の学芸員に準ずる能力のスタッフが一人、美術文化学科の教員が二人から三人が業務にあたっている。美術文化学科は、美術展などを企画運営する実務であるアートマネジメントを教えている。市民とアートの橋渡し役である人材を育てる人々が中心になって、

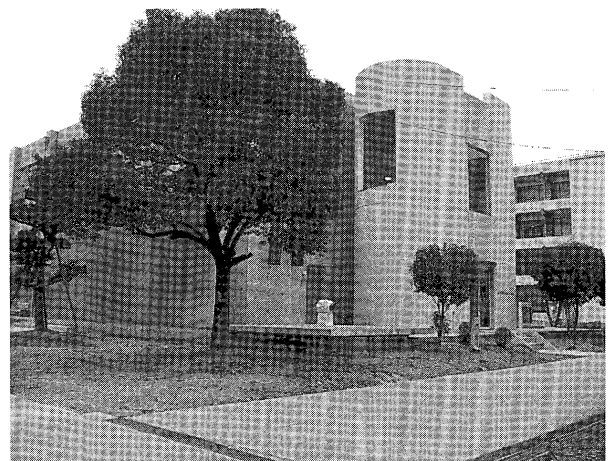
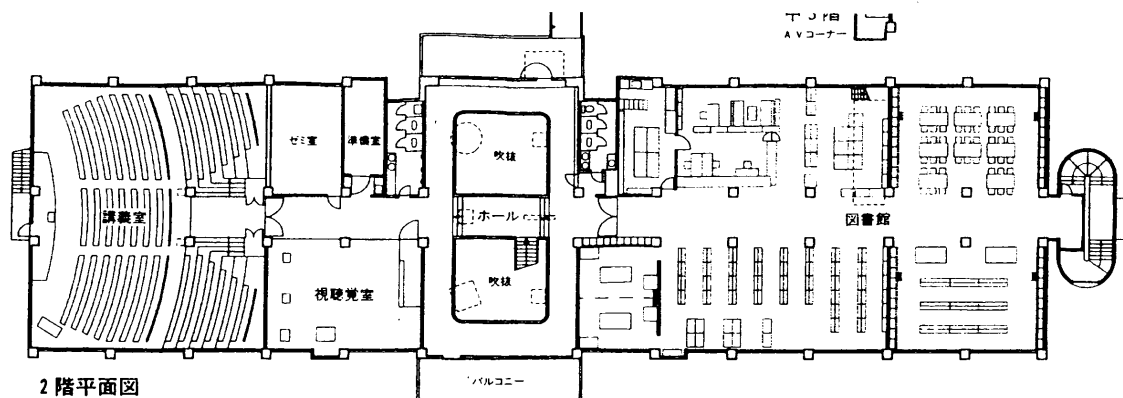
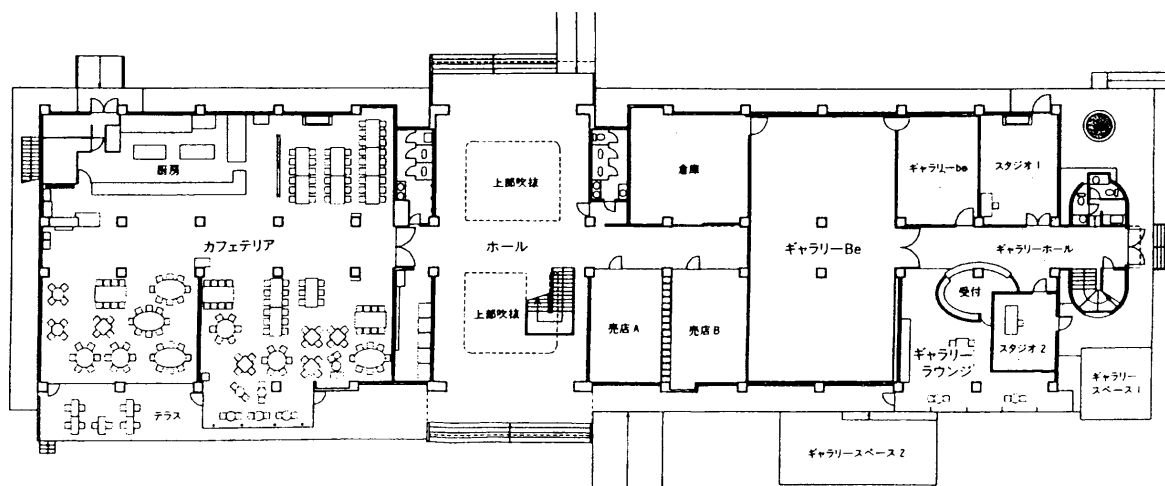


図 3-3 ギャラリー棟外観



## 2 階平面図



1階平面図 1/500

図3-4 名古屋芸術大学ギャラリー棟平面図

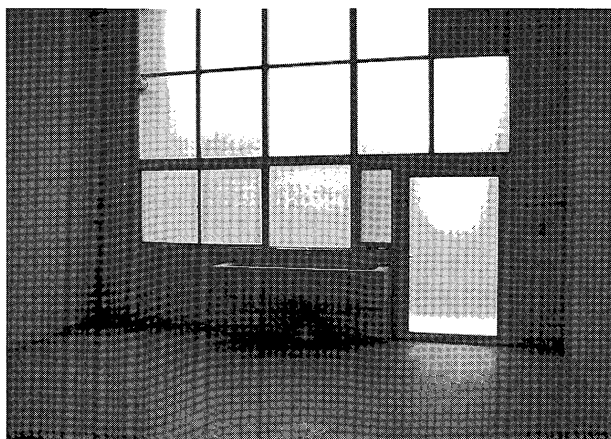


図3-6 スタジオ1

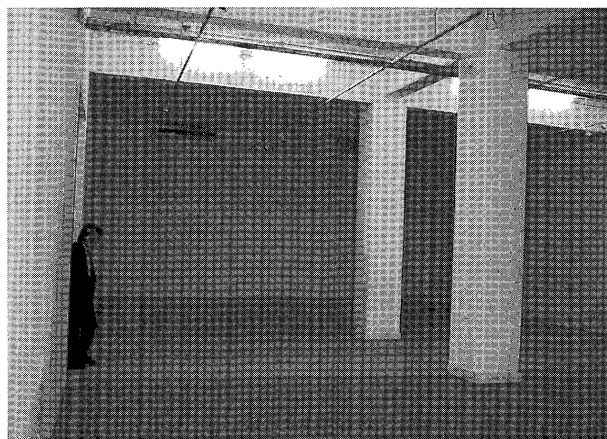


図3-5 ギャラリー Be

見せるものを計画しているギャラリーは、他にはない個性を持っているといえる。

現在は、大学関係者で年間のすべてを利用しており、近隣地域の人々がギャラリーやスタジオを利用した例は無い。しかしながら、一年を通じてギャラリー運営により、近隣からだけでない来訪者を迎えている状況をみると、当初の目的である「大学の地域への開放」と、「広報機能の充実」を十分に達成しているように思われた。

## ② 中京大学

一九五四年（昭和二十九年）創立、九学部十三学科と教養部、大学院八研究科を擁する総合大学である。名古屋キャンパスと豊田キャンパスがあり、約二ヘクタールの広さの名古屋キャンパスは、八千人の学生が通

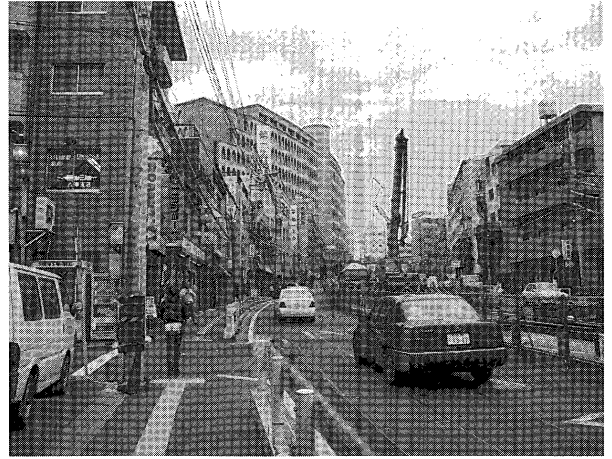


図 3-7 中京大学外観

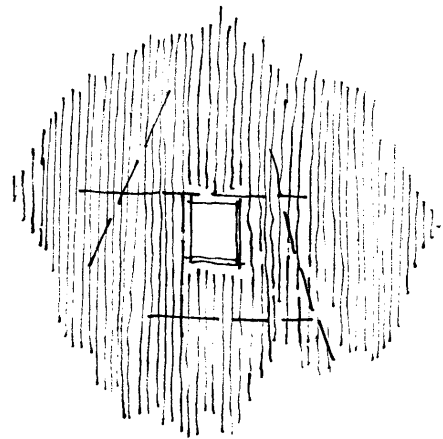


図 3-8 市街地の広がりの中の拠点

う。名古屋市営地下鉄の駅から徒歩三分の場所に立地し、周辺は名古屋大学などいくつかの大学と、ショッピングセンターを含む商業地及び住宅地が広がっている。

地域に開かれた大学をめざし、オープンカレッジによるいくつかの講座を市民向けに開いている。オープンカレッジでは一週間あたり二千五百人がキャンパスに出入りする。また、放送大学を設置しており、こちらは一週間あたり千五百人がキャンパスを利用する。一日当たり、約九千人が大学を中心としたこの界限に集散しており、大学は地域におけるにぎわいの拠点となっている。

キャンパスは、商店の並ぶ広い通りに面している。通りに面した大学建物の一階には、いくつかのテナントとして、衣料品、アクセサリ、食品などを扱う商店が並び、大学の大きな建物がにぎやかな街の一面を単調にすることを防いでいる。またキャンパスの裏側は、市の保存樹林

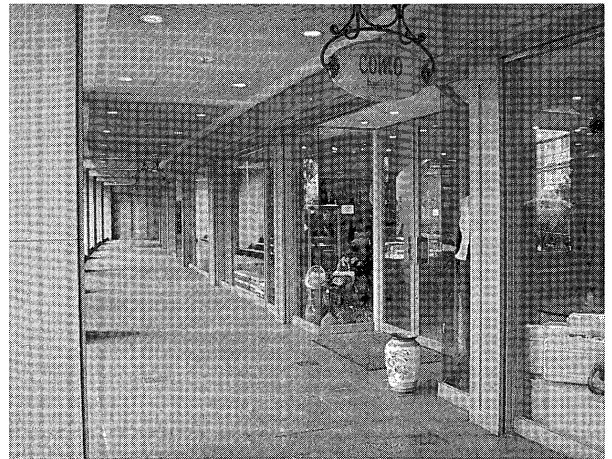


図 3-9 ショップの並ぶ中京大学1階





図3-10 中京大学に隣接する興正寺境内

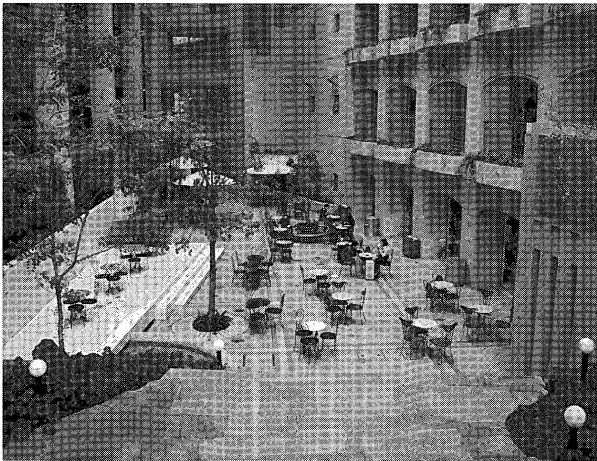


図3-11 中京大学アトリウム

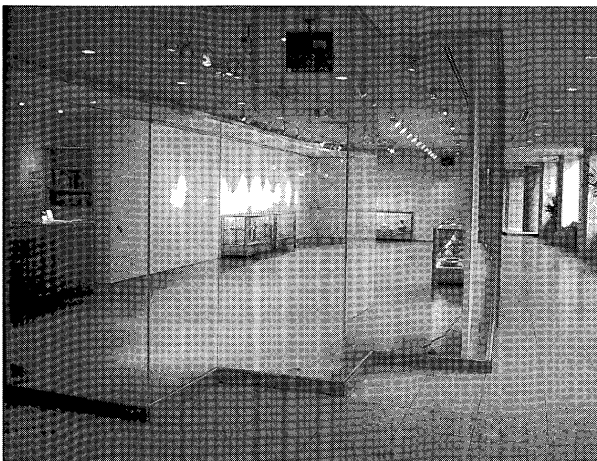


図3-12 中京大学ギャラリー C<sup>2</sup>

に覆われた寺の境内があり、通り抜け可能なキャンパスは、にぎわいと静寂をつなぐトランジションとして地域の雰囲気にも多様性を与えている。このトランジションとしての中心となっているのは、アトリウムである。ガラス天井に覆われた四層吹き抜けの元、樹木と草花が植えられ、滝が流れる中、階段や椅子に腰掛けながら憩うことのできる空間となっている。この空間は、日曜祝日を含め、朝から夜の九時まで開かれており、学生だけでなく地域の住民も利用することができる。通りの喧噪ほど騒がしくなく、寺の樹林地ほど静かではない適度な人の気配のあるあまり空間となっている。ここではコンサートも開かれる。地域にとっては、半公共の貴重なオープンスペースである。

通りに面した部分の二階には、ギャラリーが設けられている。二百平米ほどのこじんまりしたものである。地域に開かれた大学の目玉として、様々な人が自由な時間に訪れることのできる空間の象徴として設置されたそうである。ギャラリー「C<sup>2</sup>」(シースクエア)は、大学で持っている

るコレクションを中心に、年に六〜七回の企画展を行っている。学内の学芸員とスタッフ及び学外の専門家からなる十三人の会議により、企画を進めている。企画展以外の利用として、学内の教員や学生が利用する。学外の人に貸すことも可能であるが、実績としてはまだ無い。ギャラリーは、展示鑑賞を目的に、かなりの遠方より来訪者を誘引している。学外の人の大学への関心を集める施設として、充分機能している。

その他、図書館は、一般の人が自由に出入りできるほか、ホールや開いている教室は、地域の人々へ貸している。予備校の模擬試験、英語能力検定などの会場としても積極的に、大学施設を貸し出している。中京大学は、場所、施設の有利性に加え、運営努力により地域におけるにぎわいの拠点施設としての地位を築き、地域と一体となった大学の様相を見せている。

## ③ ボローニャ大学

ボローニャは、イタリア北東部、商業を中心とする人口四十万人の都市であり、また、工芸が盛んなことでも有名である。古い城壁跡に囲まれた中心街は、南北二・一キロメートル、東西二・六キロメートルの広さを持つ。古くからの町並みの特徴として、ポルティコと呼ばれる歩行路がある。通りに対して建物一階部分がセットバックし、二階部分が庇の役割を持った歩行路である。通りから見るとアーチが続くことで、独特の町並みを呈している。町中のほとんどの通りから、数キロメートル離れた南西部の丘の頂上の寺院まで連続しており、人々は寒気や雨、強い日差しから守られながら、町中を移動することができる。ポルティコができた由来は、このまちの大学の人々が、雨雪を気にせずにものを考えながら、町中に点在する大学の施設を行き来することができるようにする目的であったといわれている。

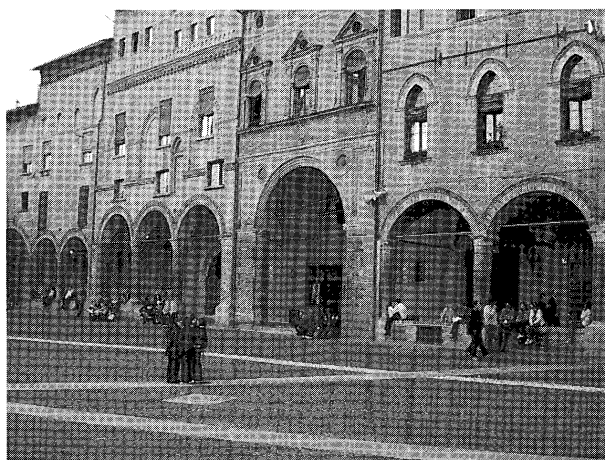


図3-13 ボローニャ 街中のポルティコ

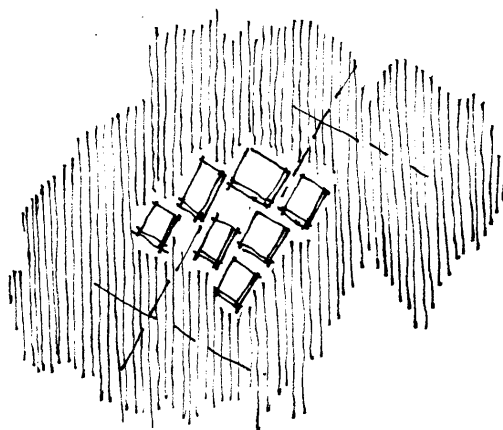


図3-14 市街地の中の大学コンプレックス



図3-15 ボローニャ 街中にたむろする人々

ボローニャ大学は、十一世紀から続いているものである。現在、学生数は十万人である。学生以外の人口の四十万人に対し、大きな割合を示しているといえる。大学は、農学、工業化学、経済学、薬学、哲学、文学、医学、統計科学など、十五の学部からなる。施設は、旧城壁内の北東部の一面にコンプレックスとして集まっており、大学の人々を相手に商売をする店や食べ物屋と共に大学街の様相を示している。近辺の通り、広場、公園、レストランなどいたるところで、学生らしきグループが数人から数十人のグループで集まっている様子が見られる。特に週末における通りと広場の屋外空間は、学生のにぎわいで埋め尽くされている。

市民や観光客の出入りする大学の施設としては、図書館、十八世紀に建てられた四層の客席からなる劇場、研究資料を中心に見せている博物館がある。博物館は、入場無料ながら、農学関係で世界中から集められた動植物標本や、医学関係の解剖モデル、天文学の観測機器などが、映像ブースなどの新しい展示機器によって見せられている。市内に五十軒





図3-17 通り抜けのできる大学建物

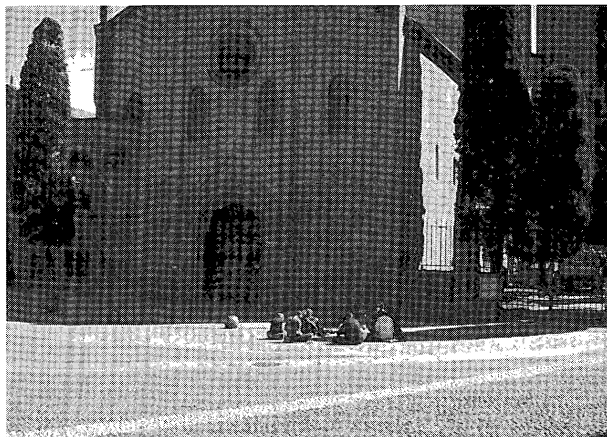


図3-16 街中の広場で行われる授業



図3-19 ボローニャ大学コンプレックスの中の広場



図3-18 通り抜けのできる大学キャンパス

ほどある美術館、博物館のひとつとして、観光スポットとなっている。

大学の建物は、どれも自由に入ることができる。街区間の近道として、大学の建物廊下を行くまちの人も見受けられる。表通りの車による喧噪とは異なる、人々の話し声によるガヤガヤとした雰囲気は、独特の街路空間を街に提供している。また、大学の人々が街の広場空間を利用して、授業していることもある。車の入らない広場で、車座になって授業している様子は、大学が大きな構成要素となっている街の景観の特徴を強調するものとなっている。

ボローニャでは中心市街地の居住人口を増やそうと、古い建物の修復を数年前から行ってきた。修復により人がより快適に住める形にはなったが、行政当局の思惑通りに、部屋の持ち主は郊外から都心へと移ってこなかった。修復された部屋は、事務所や学生の居住の賃貸に使われているようである。ある人

の感想は、「昼間だけ多様な職の人々が見られるが、夜は、学生がほとんどの街で、本来の都市らしくない。」というものである。都心の空洞化という現実を前に、大学がまちなかにあることは、学生相手の部屋の賃貸が成立しかつ夜間人口の足しになっていることや、店やレストランの商売が成り立っていること、通りににぎわいがあることなど、好ましい都市形態の保全に少なからず役立っているように思える。学生のアクティビティによる特徴あるまちなみを見せている街である。

#### ④ フェラーラ大学

フェラーラは、人口十二万人の都市で、ボローニャと同地方の平野部に位置する。中心市街地は、世界遺産に登録された城壁に囲まれており、その広さは南北二・六キロメートル、東西二・四キロメートルにわたっている。平坦な地形、そのコンパクトな大きさ、車両交通の制限された



図3-20 フェラーラ中心街

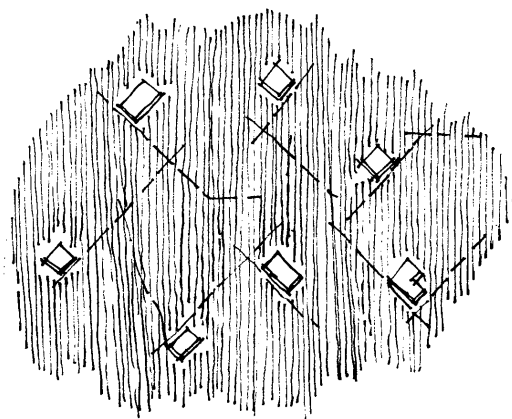


図3-21 市街地に点在する大学施設群

中心街により、自転車による移動が便利な「自転車の街」として評価されている。その町並みは、中世に形成された部分から、ルネサンス期の都市計画による広がり、修復された城壁、近代の道路整備、城壁外の現代の開発まで、年代ごとの都市の発達の様相を明瞭に見せている。

フェラーラ大学は、この城壁に囲まれた南北二・六キロメートル、東西二・四キロメートルの中心市街地に、学部または学科単位に点在している。六学部で、二十六の施設がまちなかに散らばっている。散在していることで、大学単位での様相を持たないように思われるが、市街地のこじんまりとした大きさや、中心街の車両交通の規制された街路や広場は、行き交う際に誰かしら顔見知りと出会う形態となっており、学生同士の交流のためのキャンパスの一部のように使われている。様々な商店やレストランも、集まって商売を営んでおり、学生がパートタイムで働いていることで、大学関係者が街で出会う機会は、多いものである。

大学施設は、新しく建てられた建物もあるが、多くは、古くからの建

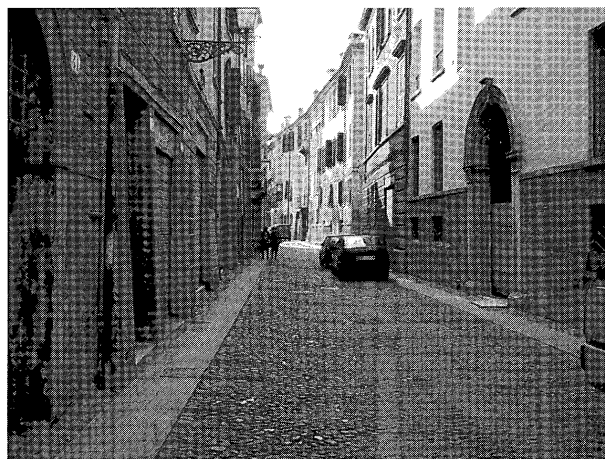


図3-22 建築学部のあるまちなみ



図3-24 ポプラの街路樹



図3-23 精神病院を改築再利用した建築学部  
の校舎と中庭



図3-26 ポー川沿いの土手の緑地



図3-25 城壁とその内外の緑地

物の再利用である。たとえば建築学部は、以前は精神病院であった建物を、改築し再利用している。通りに対しては、昔ながらの様子を見せている。建物の用途が変わり、出入りする人の種類も変わっているが、地域の町並みは、人々の行き交う様子と共に保全されている。

また、点在する大学の施設は、まちなかに小規模ながら緑地を提供している。建築学部の施設の内側には、昔からの中庭がキャンパスの一部として使われている。この部分は、地域の住民が出入りすることは自由である。通り抜けや休憩などのアクティビティに寄与している。

大学の提供する緑地は、住人個人の植木鉢から郊外の河川までの、緑地の連続性の一画を担っている。町中では、個人が楽しむベランダのプランターの緑、中庭の緑、広場の緑、街路樹、そして城壁内側の土盛りの緑が小さなスケールから連続している。城壁の外では元は壕であった幅三百メートルにも及ぶ緑地、公園、農地、そして幅が数百メートルのポー川へと大きなスケールへ、緑地が連続している。大学の提供する緑地はこれの中で、スケールとしては比較的小規模な中庭の緑にすぎないが、まちなかに点在する二十六施設という数の多さが、緑地の連続性における重要な要素となっている。

フェラーラの大学施設がまちなかに点在している様子は、そこに出入りする人々のアクティビティと、開放された緑地により、にぎわいがあり、か

つ、イタリアでも比較的緑多いという評価を受ける良好なまちなみを形成している。大学と共にある街のひとつの理想型と思われる。

#### 4 おわりに

金沢美術工芸大学の移転を念頭に置きながら、タイプの異なるキャンパスを見てみると、街との関わりにおいて、どのようなタイプのキャンパスに近いものを将来形として目指すかは、議論を尽くすべきことと考える。過去二十年の中で金沢でもほとんどの大学が、より広い敷地環境を求め郊外へ移転してきた。移転先の郊外地域では、学生居住による住民の増加、商店の増加といった発展が見られる。その一方では、都心の空洞化に拍車をかけたこと、山林農地の開発による都市の背景の郊外自然環境の劣化、郊外人口の増加による自家用車の利用の増加による交通環境の悪化といった弊害をもたらした。これらの事実を前にすれば、金沢美術工芸大学の移転も、大学単体の問題ではなく、地域計画の中で議論される性格のものであることは、明らかである。美大の移転について様々な視点で議論することは、大学が立地することにより周辺及び街におよぼす効果をもう一度評価する良い機会と考える。

#### 参考文献

『21C New キャンパスの創造と計画』発行所・地域科学研究会

(さかもと・ひでゆき 環境デザイン)

(つば・たかひろ ランドスケープデザイン)

(二〇〇一年十月三十一日受理)